

都市化の進展はまず農用地，特に畑地の減少をもたらした。農地転用も年によって変動があるが年々増加し，田の転用も増えてきている。無秩序な都市化を規制するため都市計画地域が指定されたがあまり見通しは明るくない。農業生産をみると戦後米作が著しく拡大したが農業の選択的拡大が唱えられた昭和30年代の後半から野菜，果樹，畜産が伸び特に酪農が発展したことがわかる。現在はどれも縮小ぎみで，最近麦作の集団機械化栽培がはじめられたが全体に省力化の傾向が顕著である。また農家数の減少が農業人口ほどでないのは兼業化が進展しても完全離農する農家が少ないからであるが，経営耕地規模は全体的に縮小している。工場の進出，東京への通勤距離にあることなど労働市場が近いため第2種兼業農家が圧倒的である。兼業の内訳をみると恒常勤務の雇用兼業や世帯主あとつぎ兼業が多く農業は全体に省力化し，生産性の方はおろそかにされがちである。

上尾市付近は元来後進的農業地域であったが以上のように近年でも全体的に積極性を欠き縮小の傾向が顕著である。しかしその中で少数ながら酪農や施設野菜などに積極的にとりくんでいる人達もいる。

新しい農業の試みをみると第3次産業的情報化時代になっているのに気づく。農業自体の機能についても再考の必要があろう。

いずれにしてもこれから農業経営をしていこうとすると様々の才能や高度の技術が必要とされる。横のつながりをしっかり形成して情報交換などを盛んにし積極的に農業にとりくんでいかねばならぬだろう。

栃木市の都市地理学的考察

碓井澄子

栃木市は栃木県の南西部に位置する人口約8万，面積120 km²の都市である。集落形態のうえでは，市の北西部に位置する足尾山地を南東に流れる永野川がつくった扇状地のうえにできた谷口集落である。都市機能の面から栃木市の発達をたどってみると，まず中世期に城下町として集落形成が開始されたが，近世以降は市場町として特徴づけられる。栃木市が市場町として中心性を増大したのは交通に負うところが大きく，市の中心部を流れる巴波川の水運と江戸―栃木―周辺地域を結ぶ例幣使街道が，栃木市の商業機能を増大させた。明治期にはいこうした商業機能のほかに，栃木県の県庁所在地として行政機能をも備え，その中心性はますます大きなものとなった。しかし明治も中頃になると，河岸交通は次第に鉄道交通にとってかわられるようになり，鉄道幹線からはずれた栃木市は宇都宮などと比べその成長はやや緩慢となる。この時期に県庁が栃木市から宇都宮に移されたことも，都市成長にとって大きな打撃であったと思われる。昭和35年以降の栃木県内の各都市の成長を人口・商業・工業の面からみると，主要鉄道幹線上の都市（とくに宇都宮と小山）で著しく，栃木市はやや停滞ぎみである。そして県内第2の都市足利が，県都宇都宮とはほぼ独立的に，自律的な成長を示しているのに対し，栃木市はその地理的位置から宇都宮および小山という急成長都市の影響を大きく受けている。そのため栃木市は近隣町村の中心核としての性格をもちながらも，宇都宮や小山に

多くの通勤通学者・および買物客を送り出している。栃木市の近隣町村（大平・都賀・西方・藤岡・岩舟）は現在もなお生活のうえで栃木市に依存するところ大であるが、今後栃木市がこれら近隣地域の中心核としてより充実した力をつけていくためには、近隣町村および宇都宮・小山までも含めた広域点な視点から都市のあり方を考えていく必要があると思われる。

隅田川流域の土地利用とその変遷

大 関 百合子

調査地域はいわゆる東京低地といわれる所で、西の端は山手台地の崖、東を荒川放水路とし、岩淵水門より下流の隅田川流域を対象とした。この地域は東京の中でも、大田・品川の城南地区と並び称される工業地帯である。

この論文は、歴史的な土地利用の変遷を見て行くことを目的とし、江戸に幕府が開かれた17世紀頃から、隅田川とのかかわりをも含めて、土地利用がどのように変わってきたかを大きく5段階に時代区分し、その時代背景などを見た。

江戸時代は、日本橋・神田を中心に、年代を経るに従って、市街化地域が拡大し、農地は市街地の周辺へと移り、山手台地上は主に武家屋敷・下町は商業地域として商人・職人などの居住地に利用されていた。

隅田川の洪水による下町の被害は大きく、徳川幕府は江戸市街の拡大に伴って、埋立や河川の改修が必要となった。そして、この頃から、江戸の町への物資運搬の交通路として、隅田川は重要になってくる。また、遠方から運ばれてきた物資をもとに、それらの加工業がおこり、だんだん河川沿いは工業的土地利用が行なわれるようになる。

こうして明治時代になって、西洋から近代工業技術が入ってくると、物資運搬の便のよい、また工業用水となる地下水の豊富な隅田川沿いや運河沿いに、官営工場や大工場がたてられ、その周辺には関連産業の中小工場が集まり、隅田川沿いは大工場地帯となった。

その後、日清・日露戦争・満州事変・第2次大戦などの軍需物資の需要激増によって、この地域の工業化は更に強化され、関東大震災や戦災による壊滅状態からもいち早くたち直り、ますます工業地域を拡大していった。

だが、地盤沈下の激化・公害問題などにより、今や大工場は大消費地である東京に立地するより、広大な敷地が得られ、工業用水の得やすい地域、または原料立地の方が有利になる傾向さえ見えてきている。

東京の中でも工業的土地利用度の高いこの地域は、無計画な土地利用であったので、大工場の跡地が住宅地として変わりつつある現在、移転したくとも移転資金のない零細・中小工場はとり残され、住工混在の中でますます不利な状態になってきている。

この地域は零細工場に特徴があり、零細工場に重点をおいた政策がとられるべきであろう。